

文明化と身体

今西 一

はじめに

イギリスの社会学者アンソニー・ギデンズは、近代社会のシステムが、「信頼」(trust)という「信仰」のもとに成り立っていることを強調する。

私は、自宅でただくつろいでいるだけでも、私が依拠する専門システムに組み込まれている。自宅の階段を上る際、たとえ建造物が原理的に倒壊しうることを承知していても、私はことさら何の懸念もいだかない。住宅の設計と建築について設計者や建築業者が用いる知識のきまりについて私はほとんど知らないが、それでも私は、その人たちがおこなったことがらを「信じて」いる。(中略)家を出て車に乗ると、私は専門知識が徹底的に浸透している場面——車の設計や組み立て、高速道路、交差点、交通信号など多くのものを含む——に入り込むことになる。

しかし今日、阪神大震災や、オウム真理教のサリン事件、銀行倒産等々の事件だけをとっても、日本人の「信頼」と「安全」の〈神話〉は、崩壊の兆しを示している。私は、ギデンズのように、現在を「モダニティが徹底した局面」と見ないで、モダニズムの「神話」が解体している局面だと考えている。¹⁾

たとえば「家庭」や男女関係など、従来の人間関係の基本的な部分にも、大きな変化が生まれている。「家庭」ということだけを見ても、先進国ではシングル化の著しい進展が見られる。「パリの全世帯の、実に半数以上が単身世帯な

のである。フランス全体でも、約二七パーセントの世帯が単身世帯⁽²⁾になっている。現在フランスでは、非婚カップル、シングル・マザー、再婚・再再婚家族（「複合家族」）、不妊症と人工生殖などが大きな社会問題となってきた。また男女の関係にも大きな変化が見られる。かつての「男らしさ」「女らしさ」という境界もまた、崩壊しつつある。

フランスの哲学者エリザベート・バダンテールは『男は女 女は男』という本のなかで、現在を「夫権制の終焉」の時代、「両性具有の到来⁽¹⁾」としている。しかし氏の議論からは、記者の上村くにこ氏も指摘しているように、男性たちが自分たちの支配権を、そうやすやすと手放すのか、という疑問が生まれてくる⁽³⁾。

近年のモダニティの崩壊（ポスト・モダン）状況は、近代「知」の枠組みのなかで作られてきた戦後歴史学の方法にも、大きな転換を迫っている。本小論では、そのなかでも特に最近の歴史学のなかでの「身体」論の浮上と、「性差の歴史学」について紹介し、若干のコメントを述べてみたいと考えている。

一 「身体」論の浮上

最近の日本の歴史学では、いつのまにか崩^レ壊^レ的^レに概念の転換が行われている。たとえば「民族解放（運動）」という言葉が使われなくなると、「脱植民地化」というパワー・ポリティクス⁽⁴⁾の概念が使われるようになってきている。また「民族⁽⁵⁾」という概念に対して、「エスニシティ」という概念が使われるようになり、「階級（闘争）」に対しては「社会的結合⁽⁶⁾」という概念が使われるようになっていく。私は、これらの現象は、戦後歴史学における「解放幻想」の終焉だと考えている。

「民族⁽⁷⁾」については、フランス史の二宮宏之氏は、次のように語っている⁽⁸⁾。

フランス革命により「一にして不可分の」国家体制をつくり上げたと見做されている国家においても、オック語文化圏としての南フランスは、その独自性を強く主張し、ブルターニュにおいても、ブルトン語を象徴とするケルト

文化を掲げてパリの支配に抵抗する動きは根強い。スペインにおけるバスクの独立運動や、ベルギーにおけるフランとワロンの言語対立も、その激烈さにおいて、近代国家なるものの内実を露わにしている。他方また、民族自決の原則の下に政治独立を達成した、第三世界における多くの国々においては、独立後ただちに、深刻な「民族紛争」が激発することとなった。こうした事態は民族自立の側面からのみ民族解放闘争を捉えて来た視点を裏切るものであったと言えよう。

フランス革命などの古典的な「民族統一」＝「国民国家」論が批判されているとともに、近年の社会主義体制の崩壊のなかでの、中国やベトナムの「開発独裁国家」化という現象は、第三世界の「民族解放運動」なるものを再検討しなければならぬ状況にさしかかってきている。⁽⁵⁾これは勿論、「民族解放運動」をア・プリオリに正しいものと考え、日本のアメリカからの「独立」を、「民族解放運動」として捉えてきた、戦後の革新運動や歴史学の方法自体にも反省を迫るものである。⁽⁶⁾

また二宮氏は、「十八世紀末葉より十九世紀にかけてヨーロッパを中心に形成されたネーション・ステート（国民国家）を、世界を読み解く基本的な枠組みとしてきたが、そのさい、『階級』と『民族』という二つの概念を、歴史認識の座標軸としてきたといつてよからう。それは、まずもってネーション・ステートを正当化しようとする支配的言説を支えるものであったが、それに対抗する批判的言説もまた、この点では同じ土俵に上がっていたのだった。『社会運動』もまた、階級闘争と民族運動に収斂されることになるが、げんに戦後の社会運動史研究は、このような枠組みのなかですすめられてきたのであった。これにたいし、運動を突き動かしていたものをよりの確にとらえるために、運動の背後にある社会的紐帯を、より多元的に、また状況にそくしてとらえようとする視点が提起されてくる。今日流にいうならば、日常的プラティークに焦点を定めた対象との取り組みが求められたのであった」とする。そこでE・P・トムソンのモラル・エコノミー論や、ミシェル・ペローの「ストライキのなかの労働者」などの研究が、その優れた例としてあげられる。

また「第二にあげておきたいのは、社会構成史の領域である。ここでも支配的なパラダイムは階級構造の分析であり、民族の形成史であった。奴隷制・農奴制・資本制といった段階論をとっても、国民経済を背景としたネーション成立過程の分析にとっても、キー・コンセプトは階級と民族であった。しかし、問題の視角が近代社会への発史的アプローチからしだいに多元化してゆくなかで、ここでもまた近代中心主義の再検討がはじまったといつてよからう」とする。^⑦

二宮氏の指摘するように、「階級」とか、「民族」という概念で歴史を捉えられることがリアリティを喪失してきている今日、では何で歴史を認識していったらよいのであろうか。そのひとつが、「身体」であると氏は語っている。

『からだ』の復権は歴史学にとって急務となります。「色・音・匂い・味・リズムといった感覚的ファクターが、人間集団のアイデンティティ形成に大きな役割を果たすことは、民族学研究の夙に教えるところですが、それはまた、排除・差別の契機としても、重要な意味を持ちます。われわれが異文化と接したと感ずるのは、世界像とか価値観のレヴェルでの違和感以前に、先ずもつてこの感覚的ファクターによるところが大だったと言つてよいでしょう。それにも拘らず、感性の領域は、歴史学のまさしく『未開の地』でありました^⑧」。

フランス史では、既にアラン・コルバンによって、「感性の歴史学」が提唱されている^⑨。このように今日の歴史学は、マルクス主義のようなグラランド・セオリーへの不信をつのらせて、文化人類学のフィールド・ワークの「知」や、哲学的には現象学の「直感的認識」やフーコー理論へ接近していつている。そのことが、「身体」論を浮上さすひとつの前提になっていると考える。

二 山之内靖二メルツチの提言

このような「身体」論の浮上の状況を、社会科学者の山之内靖氏は、イタリアの哲学者アルベルト・メルツチの研究を援用しながら、次のように説明する^⑩。

氏は現代社会が、産業社会から情報社会、階級社会からシステム社会に転換しており、階級政党は「包括政党」になったとする。そして、「第一に、理性が描き出す客観的構造とみえるものが、実はきわめて流動的な対象の暫定的な状態にほかならないのではないか、という問いがでてくる」。「第二に、社会科学の研究対象において不確実性は例外ではなく、むしろ常態であるとするならば、すでに客観的に存在している構造を前提として研究を始めることはできない。むしろ、不確実性、暫定性をその本性とするものについて、いかにしてなお規則性が存在しうるか、という問いをたて、まずこの問いに答えておかなければならないであろう」というのである。「不確実性」を前提とした社会科学の方法と、いうものが考えられなければならない。

その場合、「第三に、かつて理性がしめていた社会科学上の特権的地位が失われてみると、身体的経験にもとづく認識に新たな意味が生じてくる。勿論、理性の不確実性にかわって身体が確実性の根拠となるのではない。だが、理性の不確実性が明らかになってみると、身体の不確実性はただちにマイナスの要因だとはいえなくなり、少なくとも理性と等価なものへと浮上してくるであろう。我々は、不確実な理性、不確実な身体的感覚をもちいて複雑きわまりない暗黒の世界に何らかの意味空間をえがきだし、それを手掛かりとして行為実践へと乗り出しゆくのである」。「第四に、アダム・スミスが『国富論』で分析の基礎にすえた社会的分業は、その後もますます進展し、社会の内部に多様な部分システムを生みだしている」と、「身体」論と社会システム論の復権を提唱する。

社会システム論については、氏はハーバーマスマスルーマン論争を詳説しながら自説を展開するが、ここではそれは省略して、氏が紹介したアルベルト・メルツチの『現在に生きる遊牧民』のなかの身体文化の再生論を見てゆきたい。

メルツチは、現在の「身体」の危機を次のように説明する。¹²⁾

子供の生誕は人類の再生産を可能にする基礎条件である。だが、避妊技術が発達し、大衆現象として拡がった結果、人間の生物的規定性と社会的規定性の自然的な補完関係は失われてしまった。「メディアと市場で宣伝されている文化モデルでは、身体はしばしばエロスを欠いた性的パフォーマンスの機会となっている。見世物化されながらも

エロスを欠いたセクシュアリティは不妊を好み、環境的ファクターのインパクトを追加する」。性的メッセージの過剰にして無制限的な展示は、セックスからエロスを剥奪し、それを単なる生殖器へと閉じ込める。豊かな社会は、再生産（生殖）領域における彼らの研究の勝利と技術達成を祝っているまさしくその瞬間に、その再生産的基盤を破壊しはじめたのである。

さらに、先進産業社会におけるストレス、環境汚染、産業化食品等が不妊の原因を増殖している。「不妊は、文明の『ノイズ』によって課された身体の沈黙ともいうべきものを表現している」のである。産業的中心諸社会における出生率のはなはだしい低下と、それとは対照的な周辺諸社会における爆発的な人口増加は、文化間、地域間に變動と紛争をもたらし、地球規模での国家間関係の修正をひきおこすに違いない。解放的社会プロセスは、その『予期せざる結果』に直面している。

メルツチが指摘するように、現在は人間の「身体」にとって未曾有の危機の時代だといえるかもしれない。ここに「身体」論が浮上してくる現代的な意義がある。そこで、山之内氏は、その認識論の転換も含めて、次のような提言をする。

「第一に、この事実は神ないし精神にたいして自然や身体を価値的に低い領域とみなし、さらには頽廃した領域とさえみなしてきた西欧近代の思考様式が終焉したことを物語っている」。「第二に、身体はたしかに道具的合理性に還元されるものではないが、かといって暗黒や倒錯の記号をふされるべき領域ではないということ、従って、他のおおくと並ぶ人間的経験の一部を構成しているということ、この認識が受け入れられたことをしめしている」。「第三に、身体は本能という曖昧なレヴルに追放されていた従来の状態から解放され、コミュニケーションにおける基本的な人間的形式の重要な領域として認められるようになった」。「第四に、現代社会においては、身体の復帰はアイデンティティーへの新たな探索の出発点となっている」。「身体の文化の主張に、人間行為とは関わりなく存在している純粹無垢は自然といった観点が入り込んでいることに警鐘を鳴らし、自然・社会二元論の復活に陥らないよう留意を求めている」¹³⁾。

認識論のうえからも、理性的な認識が、感性的な認識の上位にくるといふ「科学的」認識論の再検討が必要になってきている。また「身体」を「コミュニケーションにおける基本的な人間的形式の重要な領域」とする必要性も説かれている。このような山之内氏らの議論を、歴史学の場で、より具体的に展開したのが、荻野美穂氏らの「性差の歴史学」だと考える。山之内氏らの議論とも重なる部分があるが、荻野氏の主張を紹介しよう。

三 「性差の歴史学」^{ジュンダー}

荻野美穂氏は、「性差の歴史学」という論文のなかで、「女とは生殖において男と対をなす一方の性であり、階級や人種や民族といった両性に共通する分類枠組みとは別に、もしくはそれと密接な関係をもちつつ女の実存的状况を規定してきたのは、その解剖学的、生理学的特性、すなわち性差と、それに人為的に付随する社会的、文化的、宗教的規範であったし、現にあり続けているからである」とする(七五頁)。「性差」というものは、確かに「社会的、文化的、宗教的規範」という側面によって規定されるが、荻野氏の場合は逆に、「解剖学的、生理学的特性」も重視する必要があることを強調する。「リブがフェミニズムと名を変えて理論作業が進行する過程で女の性がむしろ後景に退いていった」(七六頁)とも忠告する。

そして、従来のフェミニズムの主張を三つに整理する。まずシモーヌ・ド・ボーヴォワールら「近代主義的フェミニスト」に典型的に見られる、女の生殖機能を屈辱、醜悪と受けとめる自己否定的身体感覚(七六頁)である。「このタイプの身体感覚からは、近代科学が生殖機能からの『解放』をもたらすまでは、女は生物学的宿命に翻弄される無知で惨めな存在であったとする、同性蔑視的歴史観が導き出される」(七七頁)。

氏は、「近代主義的身体感覚」の問題点として、①「生殖コントロールの試みは洋の東西を問わず人類の文明と同じぐらい古い歴史をもっている」。「もちろん、現代のピルや合法中絶と比較すれば、過去の避妊法が一般に確実性や安全性

の点で劣っていたとはいえようが、アンガス・マクレランはそれとでも、当時の人々の心理面と切り離して単純に二〇世紀の基準を当てはめ、『効いた』かどうかを判断するのはアナクロニズムであると警告している」（七八頁）として、その近代主義的な「歴史観」を批判する。

また②「科学技術の『進歩』を無批判に受け入れることからくる危険」（七八頁）についても注意を喚起する。「近年における生殖テクノロジーの異様な独走や、管理分娩、胎児選別、子宮・卵巣摘出手術の濫用などに見られる過剰医療の問題化は、ようやく科学に女性解放への期待を託すことがいかに高価な代償を伴う幻想であったかを明らかにしつつある」（七九頁）という。

次に氏はエコロジカル・フェミニスト、その代表として青木やよい氏らの問題点も指摘する。「産む性としてだけでなく、癒す者としての女の貢献についても、歴史の中に正当に位置づけが与えられていくべきであろう。だが、女が女であることはなんら恥ずべきことではないのと同時に、そのこと自体に超越的な価値があるわけではないのであって、過度の神秘性に陥る危険はつねに警戒しなければならぬ」（八〇頁）とする。

そして最後に、「ヴィクトリア時代の身体感覚」、「女性性のうち母性についてはこれを認め、アイデンティティの拠りどころとするが、女のからだや性そのもの対しては拒絶反応を示す「一律背反的立場」を批判する（八〇～八一頁）。

ただ氏のように、「日本におけるヴィクトリアン・セクシャリティの形成」を、「その端緒は明治初期に矢つぎばやにうち出された」裸体禁止令など（八二頁）として、明治初年の裸体禁止令などを、「ヴィクトリアン・セクシャリティ」の問題として考える議論には、いささか違和感がある。明治初年の風俗改良と、明治末期の「家族」イデオロギーとは、区別して論じられる必要があるが、氏は「第一のタイプを特徴づけるものが女自身の肉体に対する嫌悪、第二が陶酔であったとすれば、第三のタイプの特徴は無知、もしくは無自覚であるといえよう」（八三頁）と総括する。

そして氏は、「男∥精神∥文化／女∥肉体∥自然」という誤った図式のもとに、女が中心となって営まれる日常生活世界に知的対象としてごく低い地位しか与えてこなかった伝統的アカデミズムとは、異なる地点から出発すること。②

「女は、その生殖機能の明示性とある程度の拘束性のゆえに男よりも肉体による規定が意識されやすい性であるが、その内実は決して万古不変ではないと知ること」。^③「肉体や性は私的な領域ではなく、『個人的なものは政治的なもの』であると知ること」(八四頁)を提言する。

具体的には避妊・墮胎などの研究でも、「リグレイやフランドランやアリエスなどに見られるように、従来の研究においては男性主導型の避妊法である膈外射精(性交中断)に重きがおかれ、その実行の程度によって避妊の普及度が測りうると仮定される傾向があった」(八四頁)ことを批判する。

「第一の避妊と墮胎は性格を異にするという点については、現代においても一〇〇パーセント確実な避妊法はありえず、性行為にはつねに幾ばくかの妊娠の可能性はつきまとうとされている。避妊を意図して失敗した場合、その後衛として墮胎が登場するのは、避妊の論理の延長としてなのである」(八六頁)。「第二に、人工妊娠中絶が完全に医師の領分と見做されている現代と異なり、一九世紀以前の墮胎は個々の女の日常生活の中に埋没していた」(八六―八七頁)。

「第三に、女たち自身による『ホーム・メイド』墮胎や、医師以外の墮胎師や産婆による処置は、その危険性や無効性が強調されることが多い」。「女の決意の固さという要素を計算に入れていない」(八七頁)。「民間墮胎法の危険性と無効性についても再考の余地がある」(八八頁)とする。「最後に墮胎は、女が自主的に行なう生殖コントロール法として重要な位置を占める。それは、時には強いられた母性に対する命がけの抵抗ともなりうる」(八八頁)というのである。細部の事実認識を除けば、氏の議論は、極めて正当な主張だと考える。

おわりに

現在では、特に二宮宏之氏が主張しているように、「階級」「民族」という認識がリアリティを喪失し、エスニシティ、身体、ジェンダーといった問題の方が、はるかに「主体」形成の契機になってきている。これは、マルクス主義歴史学

という「大きな物語」(リオタール)が終焉したことにもよるが、既に別の論稿で指摘したように、一九七〇年代から、エコロジー運動、フェミニズム、地域主義やエスニシティなど、「新しい社会運動」(トゥレーヌ)が台頭してきたことにもよる。これらの運動は、かつての社会科学の認識に、重要な転換を迫ってきているのである。¹⁵二宮氏の主張はまた、近代的な「個」か共同体かというかつての不毛な議論を克服して、〈社会的結合^{ソシアリティ}〉論を通しての新しい人間関係の再生という問題を提起している。

理性だけを正しい認識と捉え、感性を低い認識と考えてきた「科学的思考」は、歴史学のなかでも「身体」の歴史をまともに取りあげることをしてこなかった。また「生産」を「物質的財貨の生産」と「生殖生産」に分けながら、人口論などを除いては、「生殖生産」はまともな経済学の対象とされてこなかった。¹⁶これは近年、経済人類学などによってつとに批判されている点でもある。¹⁷

「身体」観においても、「近代」の価値観が過去に投影され、近代的な「ヒューマニズム」から、過去の身体刑や墮胎・間引きなどを、ただ「残酷」として指弾するだけの安易な歴史観が通用してきた。「身体」を変形させることが、「神」に接近させることであつたり、「異人」を創出し排除する文化である社会も存在するし、また存在した。墮胎や間引きが、どのような共同体の生活や性文化のなかで行われていたのか、それが近代化のなかでどのように変質していったか、などの問題も次には具体的に考えてみたい課題である。

この「近代」自体が、大きくゆらいでいる時代に、「近代」的な価値を絶対視するような価値観から、私たちはそろそろ「自由」になってもいいのではないだろうか。〈異文化としての過去〉を発見する相対的な視点が必要である。

注

(1) アンソニー・ギデンズ(松尾精文ほか訳)『近代とはいかなる時代か?』一九九〇年(而立書房、一九九三年)四二〜四三、七〇頁。

- (2) 浅野素女『フランス家庭事情』(岩波新書、一九九五年) 四五頁。
- (3) エリザベート・バダンテール(上村くにこほか訳)『男は女 女は男』一九八六年(筑摩書房、一九九二年)。
日本でも現在を、むしろ「男性抑圧の時代」とし、「脱男性の時代」が進行しているという論者に、心理学の渡辺恒夫氏がいる(同『脱男性の時代』勁草書房、一九八六年)。この論者も、〈男性支配〉の解体に楽観的である。また〈近代〉を男性身体
の機械化、〈脱エロス〉化として捉え、前近代社会の〈女装〉や〈少年愛〉を普遍的なものとする氏の歴史観も表層的である。
江戸時代では〈少年愛〉はともかく、厳しい身分的規制のもと〈女装〉は社会的逸脱行為とされていたのである。
- (4) 二宮宏之「ソシアビリテの歴史学と民族」一九八八年(同『歴史学再考』日本エディタースクール出版部、一九九四年) 四五頁。
- (5) このような視角から、中国史研究のなかの毛沢東主義を最も批判しているグループに、中村哲氏と渡辺信一郎・吉田滋一・足立啓二・奥村哲氏ら中国史研究会の研究がある。中国史研究会編『中国史像の再構成』(文理閣、一九八三年)、同『中国専制国家と社会統合』(文理閣、一九九〇年)、中村哲編『東アジア資本主義の形成』(青木書店、一九九四年) ほか参照。
- (6) 戦後の沖繩「返還」闘争などの問題点については、富山一郎『戦場の記憶』(日本経済評論社、一九九五年) を参照。
- (7) 二宮宏之「ソシアビリテ論の射程」(同編『結びあうかたち』山川出版、一九九五年) 四〇五頁。
- (8) 二宮宏之「参照系としてのからだどころ」一九八八年(前掲書『歴史学再考』) 一九二〇頁。
- (9) アラン・コルバン(山田登世子ほか訳)『における歴史』一九八二年(藤原書店、一九九〇年)、同(小倉止誠ほか訳)『時間・欲望・恐怖』一九九一年(藤原書店、一九九三年) ほか参照。
- (10) 山之内靖「システム社会の現代的位相」上・下(『思想』第八〇四・五号、一九九一年)。
Melucci, Alberto, *Nomads of the Present. Social Movements and Individual Needs in Contemporary Society*,
edited by John Kean and Paul Mier, 1989.
- (11) 山之内前掲論文(上) 六〇八頁。
- (12) 山之内前掲論文(下) 一一七頁、メルツチ前掲書、一五五〇六頁。
- (13) 山之内前掲論文(下) 一一二〇三頁、メルツチ前掲書、一二二〇三頁。
- (14) 荻野美穂「性差の歴史学」(『思想』第七六八号、一九八八号)。以下、特に断りのない限り同論文の頁数。
- (15) 拙稿「近代日本の『国民国家』と地域社会」(『歴史評論』第五〇〇号、一九九一年) 参照。

(16) エンゲルス『家族、私有財産および国家の起源』一八八四年初版の序文(村田陽一ほか訳、大月書店、一九五四年)。なお史的唯物論における「生殖生産」の捨象については、以前から黒田寛一氏らの批判がある(同『社会観の探究』理論社、一九五六年)。

(17) 例えばC・メイヤスー(川田順造ほか訳)『家族性共同体の理論』一九七六年(筑摩書房、一九七七年)などを参照。